2002年(平成14年)7月31日 (水曜日)

山陰 中央新報 2002年

残した足跡明らかに

若松秀俊著『湖畔の夕映え―カルシュ博士と松江―』を読む

今から七十七年前の一九二五年、旧制松江高等学校の教壇に一人のドイツ語教師が立った。その人の名前はフリッツ・カルシュ博士、三十二歳のドイツ人である。その後十三年間、彼は松江で教鞭を執った。

著者の若松秀俊氏は、カルシュ博士とも松江とも全く関係のない大学教授である。数年前、ドイツのホテルで朝食をとりながら同僚と打ち合わせをしていた時、隣のテーブルから聞こえる日本語を懐かしく耳にした。声の主は、カルシュ博士の松江生まれの次女メヒテルトであった。それがきっかけとなり博士の日本での足跡を知り、その偉大さに感銘して生涯を読み物風にまとめたのが本書である。

カルシュ博士は哲学を専攻していたことから、ドイツ語の講義のかたわら、哲学の話をよくした。学生から「哲学についての話を」という申し出があった時、「フィロゾフィー イスト ツー デンケン、ヴァス ダス レーベン イスト（哲学は人生とは何ぞやと考えること）」と黒板にチョークで書いて話を始め、「バス イスト・ダーザイン（存在とは何ぞや）」で結ばれたという。ドイツ語を一語一語ずつ発音しながら、皆が納得するように説明されたとのことである。

また、シュペングラーの著書『西洋文明の没落』では、東洋文明の重要性を説き、「そのような環境で教育を受けて育つ、日本の若い人々の姿を見て、東方の光を探ってみようと考えている」と、来日の理由も述べたという。博士は、自分の専門を少しでも生徒に教えることに喜びがあったようである。

若松秀俊著『湖畔の夕映え―カルシュ博士と松江』

博士の話は、多感な年頃の学生には鮮明な刺激となり、多大な影響を与えたことは疑いも無い。博士の薫陶を受けて後に名を残した学生に、『長崎の鐘』の永井隆医師、「暮らしの手帳」を設立した花森安治編集長や和島岩吉・日弁連会長、衆議院議員の赤澤正道自治大臣など、枚挙のいとまがない。

私の恩師である酒井勝郎・元島根大学教授は、博士の薫陶を最も強く受けた一人である。本書に多数引用されているが、先生は博士を慕い、多くの文章を残しておられる。先生は今年、九十五歳になられる。数カ月前にお会いする機会があったが、未だ矍鑠（かくしゃく）としておられ、カルシュ博士の思想を変わらぬ口調でうかがうことができた。私も恩師を通して、博士の影響を強く受けた一人であろう。

本書は、博士が日本に残した大きな足跡を、初めて明らかにした貴重な一冊である。また、挿入されている博士の宍道湖や大山などのパステル画は、我々の原風景でもある。年月が経ち、博士を知る人は少なくなっていることは、大変残念なことである。出版を契機に、カルシュ博士の功績が見直されることが望まれる。

（江角比出郎・環境省環境カウンセラー）

『湖畔の夕映え―カルシュ博士と松江―』はA5判、227ページ。文芸社刊、1200円。